

No. 942

# '72 札幌オリンピック

オリンピック発祥の地、ギリシャで太陽の光から採火された聖火は、ついに札幌についた。雪と氷の祭典 '72札幌冬季オリンピック。冬のきびしい自然との闘いに、そしてあくなき自己の可能性に賭ける若者達の競技。黙々と栄光の道をめざしてトレーニングに励んできた成果が花開くのだ。

しかし、IOCブランデー会長の発言は大きな波紋を呼んだ。

『冬季オリンピックはすでにその使命を終ったかのようなのである。アマチュア競技として今後続行していく事は困難だ。アマ資格のない「ニセ・アマチュア」を締め出す』

そして1月31日、アルペンの金メダル候補カール・シュランツ選手（オーストリア）が、スキーマーカーのPRなどを理由に、アマチュア違反として失格になった。

『アマチュアリズムこそ永遠のオリンピック精神』と説くブランデー会長。時を経るに従って豪華になっていくオリンピックは、今、再考をせまられている。しかし、ただ、ひたすらに、この日のために、励んできた多くの無名の選手は、栄光のメダルをめざして闘うのだ。2月3日からはじまる '72札幌冬季オリンピックを。

## 横井さん帰国

—ジャングル生活28年—

熱帯の孤島、グアムのジャングルで奇跡的に生きていた元日本兵横井庄一さん（名古屋市・中川区）が昭和19年2月、グアム島へ渡って以来、28年ぶりに祖国の土を踏んだ。2月2日正午、グアムを発った日航特別機は、2時15分、斎藤厚生大臣ら大勢が迎える中、20番スポットにすべり込むように静かに到着した。8年前に死んだ志知幹夫さん、中島悟さんの遺骨、横井さんが使用していた生活道具も同機で一緒に届けられた。トラップに立った横井さんは、やや疲れた表情ではあったが、それでも元気に歓迎の人々に挨拶、引き続き行なわれた東急ホテルでの記者会見で次のように語った。

祖国日本を見た時、ハンカチがぬれる程、涙が出た。日本が、これ程までに文化が発達していたとは思ってもみなかった。これからは、英霊の供養をしたい。それが、私の信念だ。

その後、国立東京第一病院の特別室に入院した。孤独のジャングルから、けん騒の現代に連戻された横井さんの心は、我々がはかり知ることはできない。

空白の28年間を取りもどす意味でも、これから先、長生きして、幸福に暮らしてほしいと祈る。